



学際トーク CAFÉ

Trans-Disciplinary Issues in Brief

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム



コーディネーター：寶 馨
(防災研究所・教授)

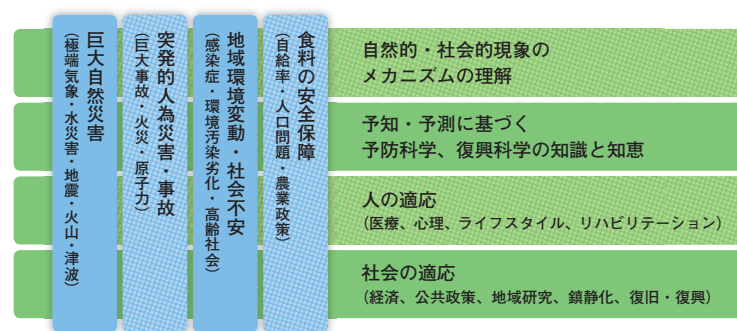
幅広い知識と深い専門性、柔軟な思考力と人間的な魅力を合わせ持ち、様々な社会においてリーダーとして活躍する人材を養成することは、京都大学の使命であるとともに、社会の強い要請でもあります。「グローバル生存学大学院連携プログラム」は、京都大学の9つの研究科と3つの研究所が推進する、新しい大学院教育システムです。現代の地球社会では、①巨大自然災害、②突発的人為災害・事故、③環境劣化・感染症などの地域環境変動、④食料安全保障などの危険事象や社会不安が広がっています。グローバル生存学大学院連携プログラムでは、これらの諸問題をカバーする「グローバル生存学」(Global Survivability Studies)という新たな学際領域を開拓し、

- 1) 人類が直面する危機を乗り越え、人間社会を心豊かにし、その安寧に貢献するという使命感・倫理観にあふれた人材
- 2) 自らの専門性に加えて幅広い視野と知識・智慧によって的確に対策を行うことのできる判断力・行動力を備えた人材

を育成しようとするものです。

※本プログラムは、文部科学省・日本学術振興会より公募された博士課程リーディングプログラム（いわゆるリーディング大学院）において、京都大学の防災研究所を含む3つの研究所と9つの研究科が安全安心分野で提案し、平成23年12月に採択された新しい大学院教育システムです。

■ グローバル生存学の範囲



■ グローバル生存学大学院連携プログラムで学ぶためには

わが国の四年制の大学を卒業したかそれと同等の資格を持つ者で、グローバル生存学大学院連携プログラムに参画するいずれかの研究科・専攻の博士前期課程に入学した者がこのプログラムに応募できます。国籍・性別・年齢は問いません。本プログラムに参画する京都大学の研究科・専攻のリストは右の通りです。より詳しくは、本プログラムのウェブページを見てください。

<http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/>

教育学研究科	全専攻（教育科学専攻、臨床教育学専攻）
経済学研究科	全専攻（経済学専攻）
理学研究科	地球惑星科学専攻
医学研究科	医学専攻、社会健康医学系専攻
工学研究科	社会基盤工学専攻、都市社会工学専攻、都市環境工学専攻、建築学専攻、機械理工学専攻
農学研究科	全専攻（農学専攻、森林科学専攻、応用生命科学専攻、応用生物科学専攻、地域環境科学専攻、生物資源経済学専攻、食品生物科学専攻）
アジア・アフリカ地域研究研究科	全専攻（東南アジア地域研究専攻、アフリカ地域研究専攻、グローバル地域研究専攻）
情報学研究科	社会情報学専攻、通信情報システム専攻
地域環境学堂・学舎	全専攻（地球環境学専攻、環境マネジメント専攻）

学際トーク・カフェ 第3号

2014年3月20日 初版発行

発行：京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム

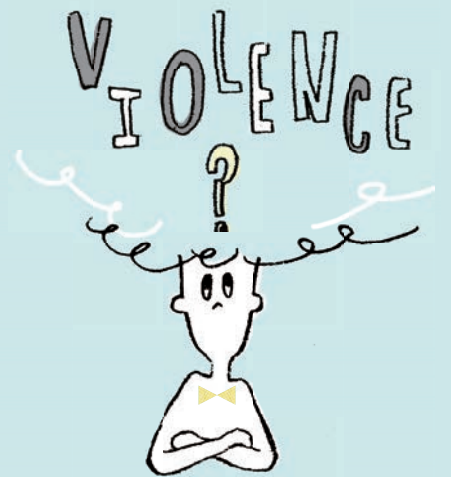
このリーフレットに対するご意見、お問い合わせは西 真如（nishi@jafore.org）までお願いします。
グローバル生存学大学院連携プログラムに関するお問い合わせは、ユニット事務局までお願いします。
京都大学グローバル生存学大学院連携ユニット
606-8302 京都市左京区吉田牛ノ宮町4日本イタリア会館内205号室 tel：075-585-7111

※このリーフレットは、グローバル生存学に関連する学術的な 이슈を、わかりやすく解説する目的で企画・発行するものです。
掲載されている記事の内容は、京都大学および京都大学グローバル生存学大学院連携ユニットの見解を代表するものではありません。

編集協力：本間咲来
デザイン：高倉 薫
印刷：スイッチ、ティフ

今号のテーマ：

人類は暴力を 克服できるか？



20世紀は「暴力的でない」時代だった？

歴史学者によれば、中世の日本人は恐ろしくキレやすかったらしい。15世紀頃の京都の路上では、子どもに笑われたとか、下女に悪口を言われたとか、そんなことが凄惨な殺人の原因になった。いったん事が起これば、復讐に次ぐ復讐が一族・同輩を巻きこみ、大規模な殺戮へと発展することもあった（注1）。

どうやら私たちは、先人たちには想像もつかないくらい「安全な」社会に生きているようだ。そしてそれは、日本に限ったことではないらしい。スティーブン・ピンカー教授の著書 *The Better Angels of Our Nature* (Viking, 2011) によれば、私たちは人類の歴史上もっとも暴力的ではない時代に生きている。確かに人類は、過去百年の間に二度の大戦と幾つもの大規模な虐殺を経験したのだが、それでも20世紀が人類史上もっとも暴力的な世紀であったという見方は、正しくないのだという。

ピンカー教授自身は認知心理学者であるが、著書では考古学や歴史人口学の成果も用いながら、人類の暴力の経験について論じている。とりわけ興味深いのは、暴力の問題をエビデンス（客観的な証拠）によって論じることの重要性を、人類史的なスケールで提示したことである。たとえば第二次世界大戦による死者の数は、単一の歴史的出来事によるものとしては、



人類は暴力を克服できるか？

overcoming violence

crimination
suicide

おそらくもっとも多い。しかし世界人口は時代によって異なるのだから、死者の数だけを単純に比較しても、その出来事が人類社会に与えたインパクトは計れない。その時代の人口に占める死者の割合を計算してみれば、13世紀のモンゴル帝国による世界征服や、19世紀以前の奴隷貿易のインパクトは、第二次世界大戦よりも大きかったという推計が成り立つのである。ピンカー教授はこの著書を通じて、人類は理性によって暴力の問題を克服できるのだという、重要なメッセージを読者に伝えようとしている。また著書で示される統計的なエビデンスは、教授の議論に説得力を与えている。暴力の克服という課題について考える手がかりとして、ぜひ手にとってみてほしい本だ。

込み入った暴力の問題に接近する

とはいえ、暴力の克服は難しい課題である。ピンカー教授の議論はわかりやすいが、それは「暴力の克服は可能だ」というメッセージを読者に届けるため、巧みに切り口を選んで論を進めているからである。以下では、暴力という複雑な問題に接近するための糸口を、いくつか提示しておきたい。

第一に、暴力をどう定義するかで問題の見え方はずいぶん異なってくる。たとえばピンカー教授は、過去数百年の間に英国をはじめとする西ヨーロッパ諸国で殺人件数が大きく減少してきたことに注目する。英国（England）の10万人あたり殺人件数は、14世紀にはおよそ20件であったのが、20世紀以降は1件程度で推移しており、殺人に関しては世界でもっとも安全な場所のひとつである。ピンカー教授は、英国においては世界に先駆けて暴力を容認しない社会規範が形成され、結果として暴力が大きく減少したのだと説明している。

しかし殺人とは別のかたちの暴力、たとえば自殺の問題に目を向けるとどうだろうか？ここでは世界保健機関（WHO）にならって、自殺は自己に向けられた暴力であると定義することにしよう。少し古い統計になるが、暴力に関するWHOの報告書（注2）によれば、英国（United Kingdom）では1999年の自殺率が10万人あたり9.3件であった。これはロシア（43.1件）と比べれば少ないものの、メキシコ（5.1件）やフィリピン（2.1件）と比べれば、英国は自殺の危険が高い場所である。また同じ報告書によれば、日本では1997年の自殺率が19.5件であった。自殺の問題を含めれば、日本や英国は思ったほど「安全な」場所ではないということになる。

第二に、直接的な暴力とは違って目に見えにくい暴力のかたちがある。研究者の中には、女性やマイノリティに対する差別をはじめ、見えにくいかたちで社会に組み込まれた暴力を「構造的な暴力」ということばで表現する人たちもいる。女性に対する暴力がインド社会に蔓延していることを、「男性に対する女性人口の割合 Female-Male Ratio」という指標によって示したのは、インド生まれの厚生経済学者アマルティア・センであった。インドの家庭では、女兒よりも男児への投資を優先する傾向が強く、女兒は十分な食事が与えられなかったり、

safety

thinking of
violence

医療へのアクセスが制限される場合がある。結果としてインド女性の平均寿命は異常に短く、そのことによって「失われた」女性の数は、数千万人にのぼると推計される（注3）。暴力は人類にとって非常に根深い問題であり、戦争や殺人による死者は暴力による犠牲の一角を示しているに過ぎないということを、センの議論は教えてくれる。

第三に、暴力について統計的に理解するということと、実際に暴力がおこなわれている場所でどのように暴力に向き合うかということは、全く別のことである。暴力が統計的に減少しているということは、誰もが同じように安全な生活を享受しているということとは違う。安全に見える社会の中で、過酷な暴力を経験している人たちがいる。そうした現場に出会ったときに、私たちは暴力とどう向き合えば良いのか。

今回は、暴力と向き合うことについて真剣に考えてきたふたりの研究者との対談をとおして、込み入った暴力の問題に接近を試みたい。そして、これは私が対談をとおして学んだことであるが、目の前に見えている暴力に向き合うことは、同時に目に見えない暴力について考えることでもある。そのことを念頭に置いて読み進んで頂ければ幸いである。

（西 真如／京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム特定准教授）

暴力について考えるなら
こんな本もおすすめ

Books



『人はなぜ戦争をするのか —
エロスとタナトス』
ジークムント・フロイト著、光文社、2008年

人はなぜ戦争をするのかという問いに、あなたならどう答えるであろうか。どうすれば人類を戦争の苦しみから救えるかというアルベルト・アインシュタインの問いかけに、フロイトが精神分析学の立場から応答した書簡。



『イエルサレムのアイヒマン—
悪の陳腐さについての報告』
ハンナ・アーレント著、みすず書房、1969年

アドルフ・アイヒマンの裁判記録を追うことをとおして、職務に忠実なだけの「凡庸な小役人」がどれほど大きな暴力の行使に関わりうるかを考証した著作。アイヒマンはナチス政権下のドイツにおいて、多数のユダヤ人を強制収容所に送り込むための輸送計画の立案を担当した人物である。著者のアーレントは著名な政治哲学者だが、「悪の陳腐さ」に関する彼女の見解が当時、世間から激しい非難を浴びたことは、2012年に制作された映画『ハンナ・アーレント』でも描かれている。

Social Suffering
Arthur Kleinman, Veena Das, and
Margaret Lock (eds), University
of California Press, 1997

構造的な暴力のもとで人々が経験する苦しみを、私たちはどのように理解し伝えることができるのか。社会の権力構造のもとで戦争や飢饉、病、拷問などが人々に強いる苦しみについて、人類学者、歴史学者、社会医学者、宗教学者など分野をこえた研究者の対話をもとに編まれた論集。おもな論考を翻訳したものが『他者の苦しみへの責任—ソーシャル・サファリングを知る』（みすず書房、2011年）として出版されている。



（注1）清水克行『喧嘩両成敗の誕生』講談社選書メチエ、2006年

（注2）Krug, E. G. et al., *World Report on Violence and Health*, World Health Organization, 2002.

（注3）「失われた女性」については非常に多くの文献がある。網羅的なレビュー論文としては、Klesen, S., and C. Wink, "Missing Women": Revisiting the Debate, *Feminist Economics*, 9(2-3)265-301, 2003.

暴力

といかにつきあうかを考える

1 飯嶋秀治 || Shuji Iijima

九州大学大学院人間環境学研究院准教授。専門は共生社会システム論。オーストラリア先住民の家族や、日本の児童福祉施設の職員・児童との関わりの中で、暴力の問題について考えてきた。

西 飯嶋先生は、海外や日本でのフィールドワークを通じて暴力の問題と向き合ってこられました。

飯嶋 少なくともはじめのうちは、「向き合った」というよりも、むしろ暴力の問題に「まきこまれた」と言ったほうが正しいですけどね。ぼくはオーストラリアの北部準州で暮らす先住民の研究に関わっています。中央砂漠地帯にあるアリス・スプリングスという小さな町で、先住民のホスト・ファミリーと生活をともにしながら調査を始めたのは十数年前、ぼくが大学院生のときです。その家族が、よく揉めごとにかからむ人たちで、家族内のケンカも絶えなかった。町では「トラブル・メーカー」と見なされている人たちでした。ぼくも調査中に誤って殴られたり、ケンカを仲裁しようとして失敗するといった経験の中で、暴力とのつきあい方を身につけてきました（注1）。

西 オーストラリア先住民の暴力と「いかにつきあうか」という問いについて書かれた文章では、先住民が置かれた非常に複雑な状況について説明されていますね（注2）。一方では、先住民への雇用差別のようなものがある、職を得られない先住民の若者がアルコールや薬物に依存することで、暴力が深刻になっている面がある。政府は先住民の暴力を問題視するけれども、実際には先住民の自治権を取り上げたり、「トラブル・メーカー」とされる人たちを目につかないところに追い払うような対策ばかりで、結局は先住民が置かれた立場をますます複雑にするだけじゃないか、と思いました。

飯嶋 ええ、確かにオーストラリアの先住民は、八方ふさがりと言いたくなるような厳しい状況に置かれています。…で



先住民の男性も参加しておこなわれた「暴力停止」の行進（2010年9月3日飯嶋秀治氏撮影）

も実をいうと、この文章を書いた目的は先住民が置かれた状況を「説明する」ことではないし、そのことで何が暴力の原因かを突き止めたいと考えているわけでもない。読者に考えてほしいのも、そのことではないんです。

西 というのは？

飯嶋 えっと、暴力の問題に取り組むとき、簡単に言えば、ふたつのアプローチがあるということをまず説明しますね。ひとつは、暴力の原因を探りあてるといふ考え方です。心理学者であれば、個人の内面的な葛藤であるとか、幼少期に虐待を受けた経験を問題にするかも知れない。社会学者であれば、貧困など個人をとりまく社会の問題に目を向けない限り、暴力の問題をほんとうに理解することはできないと主張するでしょう。

もうひとつのやり方というのは、臨床心理学のことばで solution-focused approach と言ったりしますが、問題に直面している当事者が、少しでも生きやすくなるためにはどうすれば良いかを考えます。暴力について言えば、暴力を振るったり振るわれたりする状況をどうやったら回避できるか、それを当事者に学んでもらうことを第一に考えます。

西 なるほど。だから「暴力といかにつきあうか」という問いかけになるわけですね。暴力の原因について考えることと、目の前でおこなわれている暴力にどう応じるかということは、全く別のことだと。

飯嶋 そういうことです。とはいっても、ぼくだって今でもそうですが当時はなおさら、暴力とつきあう構えなんて

なかった。どうしていいかわかりませんでしたしね。オーストラリアの先住民たちが互いに殴り合っているのに直面したときも、ぼくは文化人類学的に、彼らの行為を彼ら自身の文化的な規範とか、日常生活の文脈で理解しようとした。そしてその立場で博士論文を書いた。でも実際には、ぼく自身が暴力にまきこまれていたわけだし、目の前でおこなわれている暴力が、日常生活の文脈をこえてエスカレートしてゆき、これは何とかしないとまずいという思いもあったわけです。まあ何よりそういう場面に立ち会うのはいたたまれないですよ。

西 飯嶋さんは『支援のフィールドワーク』という本の中で、日本の児童福祉施設内での暴力の問題に関わった経験について書かれています（注3）。博士論文を提出したあと、心理臨床学者の田嶋誠一先生の勧めで、施設内の暴力を減らすための取り組みをサポートするボランティア・スタッフとして施設に入られたのですね。このときの経験が、飯嶋さんの暴力に対するスタンスを変えることになった？

飯嶋 児童福祉施設は、家庭に何らかの事情があってやってきた子どもたちの生活の場ですが、「職員から子どもへの暴力」「子ども間の暴力」「子どもから職員への暴力」という三種類の暴力が絡み合って、全国の施設で深刻な状況であることが見込まれました。暴力についてのぼくの認識が変わったのは、施設での暴力をいかに「とめる」のか？という問題に向き合う機会を得てからです。こういう介入の構えが身につけていない研究者は、「私たちは（理解以外に）何もできない」と考えたり、逆に「理解さえすれば何とかなる」と思い込みがちです。ぼくは臨床心理家との仕事を通じて、そういうスタンスだけでやろうとする危うさを学びました。

西 飯嶋さんが関わった施設では、安全委員会というものを設置して、暴力をとめたと書かれていましたね。

飯嶋 これは田嶋先生が考案した方法で、施設内に安全委員会を発足させ、暴力のケースをすべて報告し、検討します。そのうえで、子どもが暴力を回避する方法を学ぶように促すのです。当時のぼく自身は安全委員会には入らず、職員や子どもたちの身近な相談相手のような立場でした。

西 安全委員会というのがどんなふうに暴力をとめるのか、いまひとつピンとこないんですが…。

飯嶋 ひとことで説明するのは難しいんですけど、これは非



街中での飲酒を取り締まる騎馬警官。街角のセキュリティ・カメラ以外に、自動車警官、モトクロス警官、マウンテン・バイク警官が市内を監視する（2013年2月14日飯嶋秀治氏撮影）



アリス・スプリングスの繁華街トッド・モールでのサンデー・マーケット（2010年3月7日飯嶋秀治氏撮影）

常によく考えられた仕組みなんですよ。たとえば暴力を振るってしまった子どもは、なぜ暴力を振るってしまったか、安全委員会で説明しないとイケない。安全委員会の委員は10人くらいいて、それだけ大勢の大人の前に突き出されるわけだから、子どもにとってはたいへんなわけです。なのでその前に必ず、暴力を振るってしまった子どもと、施設でその子を担当している保育士さんとの間で言葉にできるように応援してもらおう。言葉で自分の気持ちや考えを表現できるようになると暴力はおさまってくる、それを保育士さんが助けてくれるという状況になるわけです。そのために安全委員会に よ ン で、職員と子どもとの信頼関係の構築を介してその乗り越え方の学習を促すわけです。

西 なるほど！ 信頼関係を築くことで、暴力以外のコミュニケーションを選択しやすいような環境をつくっていくわけですね。しかし何が暴力なのかを判断するのは、難しいときもあるでしょうね。

飯嶋 暴力を見逃すことがないように、体力の格差のある者からの接触はすべて、暴力の可能性があると考えて安全委員会に報告し、みんなで検討します。もちろん、目の前で行われていることが暴力にあたるかどうかを判断することは難しいですよ。これはプロレスごっこだから笑ってみていたらいいか、それとも遊びをよそおった暴力だから今とめないといけないうのか、とかね。暴力についてどれだけ統計的な知識を持っている人でも、あるいは暴力の原因について深く考えたことのある人でも、目で生じつつある現象の判断ができるとは限りません。目の前で起こっている力の行使を、その場でとめるべきかどうか判断したうえで、実際にそれをとめられる介入をおこなう。これは、暴力について単に理解することとはまた別のことで、つきあい方にはどちらもあった方が良いでしょう。

（注1）このフィールドワークの経緯は、飯嶋秀治「暴力問題にまきこまれる—オーストラリア先住民のトラブル・メイカーたち」武田丈・亀井伸孝編『アクション別フィールドワーク入門』（世界思想社、2008年）で述べられている。

（注2）飯嶋秀治「オーストラリア先住民の暴力といかにつきあうか」内藤直樹・山北輝裕編『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』昭和堂、2014年

（注3）飯嶋秀治「日本の児童福祉施設で」小國和子・亀井伸孝・飯嶋秀治編『支援のフィールドワーク—開発と福祉の現場から』世界思想社、2011年

暴力を確実にとめる仕組みはあるのか

2 工藤 晋平 || Shimpei Kudo

京都大学グローバル生存学大学院連携ユニット特定准教授。人生早期からの反復という観点から心を理解する精神分析と愛着理論に立脚し、個人や社会の犯罪や暴力の問題とその発達について考えている。元受刑者の社会復帰を支援するNPO法人風の家事理事。

西 暴力を克服するという課題について、工藤先生のお考えを聞かせて下さい。

工藤 難しい質問ですね…西先生は、人間の発達過程でいばん暴力が使われる時期はいつだと思われますか？

西 さあ…そういえばピンカー教授の本には、「あらゆる統計に共通の傾向として、15 から 30 歳の男性がいちばん暴力的である」というようなことが書かれていましたけど？（注1）

工藤 暴力の定義にもよりますが、単純に身体的な暴力の数で言うと2歳とか3歳の幼児に1つのピークがあると言われています。つまり何らかの葛藤があったときに、手を出しやすいということなんですけど。成人男性のような体力がないから、深刻な結果には結びつかないというだけで。

西 あ、それは子育てをしていると実感できますね。

工藤 人間がどうして暴力をふるうのか、これは文化とか学習の問題を含めて、いろいろな要因が考えられますけど、暴力は学習されるものだという立場がある一方で、逆に暴力的な衝動をうまくコントロールできている人がいるとすれば、それは暴力以外の方法で問題を解決することを生活の中で学ぶことができたからだということも先のような知見からは伺えます。学習されるのは暴力を使わないやり方だという発想ですね。

その意味で、飯嶋先生のお話にあった「安全委員会方式」は、すごく興味深いなと思いました。ある社会や集団のなかで暴力を克服してゆくために、重要なことはふたつあります。ひとつはその集団に属する人たちに対して、「暴力を容認しな

い」という規範が示されていること。もうひとつはその人たちがそれぞれ、具体的な対人関係の中で、暴力ではない方法で問題を解決するスキルを身につけることです。子どもの場合はとくにそうです。

西 安全委員会は、その両方をうまく組み合わせていると。

工藤 ええ、そう思いました。まず「暴力を容認しない」という規範ですが、これはつまり、司法制度のような目に見える仕組みから文化のような暗黙のルールまで含めて、「暴力をふるうな」と人々に命じる権威が存在するということです。中世の京都の路上は危険な場所だったという話がありましたが、それは具体的な暴力によって暴力に対峙することが、社会の規範になっていたからですね。それよりは現代の日本のように、暴力の禁止を司法の権威にゆだねる社会のほうが確実に安全だといえる。少なくとも、他人への直接的な暴力は少なくなります。安全委員会というのも、児童福祉施設の職員や児童にとって身近なところで、「暴力をふるうな」という規範を示す偉い人たちがいるということであるように思います。

西 なるほど。対人関係のスキルについてはどうでしょう？

工藤 安全委員会では、委員会での説明の前にまず保育士と児童に話をさせるということが重要に思えます。子どもは生活の具体的な場面で、じぶんの葛藤や不安を相手に伝える、そして相手から言葉、身振り、表情、雰囲気などの反応が返ってきて理解されたと感じるという経験をとおして、問題を解決することを学びます。ひとりでも良いからそうした相手とことばのやりとりを通して不安や葛藤を解決する経験を積み重ねることは、暴力を克服する上で大きな助けになります。

西 相手はひとりで良いんですか？

工藤 人間の子どもは、すべての人から同じように対人関係を学んでいくというよりも、特定の対象との結びつきをとおしてそれを学ぶということがいわれています。特定の対象というのは、心理学のことばで「愛着対象」といって、とくに乳幼児の場合は通常、母親がその役割を果たすことが多いのですが、母親にしかできないというわけではなく、近くにいる別の人がその役割を担うこともできます。たとえばお母さんが産後うつで、子どもと安定した関係が結びにくいといったケースでは、父親との関係が重要になる場合もあります。また父母の関係が悪くて子どもに目が向かないというときに、おばあちゃんと子どもとの結びつきが重要になる例もあります。

西 そのことは児童福祉施設の子どもと保育士の関係にもあてはまりますか？

工藤 愛着理論で説明するのが適当かどうかわかりませんが、子どもが安定した関係を築ける大人を見い出して、その人とのやりとりを通して自分の葛藤や不安をことばで相手に伝えるという経験を持ち、そこで学ぶことができることは重要だと思います。

西 なるほど。

工藤 発達心理学的に言えば、それぞれの家庭でお母さん（あるいは重要な誰か）が子どもと安定した関係を築けるようサポート体制をつくることで、十年・二十年あとの社会で暴力を減らすことができると考えられます。飯嶋先生のお話にあったオーストラリア先住民の家族についても、同じように早期の養育者と子どもの関係に介入することで、暴力の問題を減らせる可能性について考えるわけです。飯嶋先生は違う意見をお持ちかも知れませんが…。

西 飯嶋先生の書かれたものを読むと、オーストラリア政府は様々な方法で先住民の暴力に介入しているのですが、その介入によって、先住民が置かれている「八方ふさがり」の状況がさらに深刻になってしまうようにも思えます。直接的な暴力が減ったからといって、暴力を克服したと言って良いのかどうか不安にさせられます。

工藤 先ほども言ったように、権威によって暴力を禁止するだけでは十分でなく、そこに話のできる仕組みが必要なのですね。安全委員会の話に戻ると、これは非常に工夫された仕組みだと思うのですが、かといっているんなところに安全委員会みたいなものをただ設置していけば暴力のない社会ができるかという、それはまた別の問題だと思うのです。飯嶋先生が経験された安全委員会では、「悲惨な状況を生み出す暴力をとめる」という真の動機を持った委員が選ばれていたからこそ、効果があったのでしょう。これは想像ですが、おそらく子どもの話を一生懸命聞こうとする人たちが集まったのではないのでしょうか。ところが同じようなものがたくさんできはじめると、話は違ってきます。「権威」そのものを持ちたいという目的で委員になろうとする人たちが、そこに集まってきてしまう。そうした人たちの中には、権威の行使を通して迂遠なかたちで他者に暴力をふるうという動機を持った人たちがいます。

西 暴力をとめるはずの権威が、ある種の構造的な暴力を生み出してしまう源泉にもなっているということですね。迂遠な暴力というのは、具体的にいえば「おれのいうことを聞かないと、おまえはここに居場所はないぞ」とか、そんなことだと思って良いですか？

工藤 そうだと思います。政府と先住民、男性と女性の関係

でもじつはそうなのですが、どんな関係も理解や愛情にもとづくものになる可能性もあれば、支配に傾く可能性も持っているわけです。親が子どもを育てるということもそうですね。いずれにしても暴力をとめる構造というのはどうしても上下の関係なのであって、その権威の構造と一緒に横の関係、つまり理解や愛情といったものが存在しないと、冷たく、高圧的な関係ができあがってしまいます。暴力をうまく収めるはずだったものがむしろ暴力的な支配を生み出すものになってしまうのです。

西 結局、どんなによくできた仕組みでも、それ自体では暴力は克服できないということなんでしょうか？

工藤 暴力を確実にとめられるような仕組みを、人類はまだ持っていないと思います。またそうだからこそ、暴力をとめるという真の動機を持った人たちが、繰り返しくりかえし、取り組みを続けていくことが重要なのだと思います。

（注1）The Better Angels of Our Nature, p 104 を参照。

さらに議論を
深めるために

Books



『現実に関わりつつ心に介入する—
多面的援助アプローチと臨床の知恵』
田嶋誠一著、金剛出版、2009 年

児童福祉施設の暴力をはじめ、いじめ、児童虐待、家庭内暴力といった問題に臨床心理家として関わってきた著者が、現場に介入して問題の解決に関わる「多面的援助アプローチ」について解説した本。「節度ある押しつけがましき」といった印象的なことばで、現場への関わり方を伝える。



『社会的包摂／排除の人類学—
開発・難民・福祉』
内藤直樹・山北輝裕編、昭和堂、2014 年

若手人類学者・社会学者らによる論集。「オーストラリア先住民の暴力といかにつきあうか」（飯嶋秀治）をはじめ、先住民、難民、移民、障害者、ホームレスといった人々が政府や支援組織との関わりの中で経験する込み入った現実を読み解く。



『アタッチメントの実践と応用—
医療・福祉・教育・司法現場からの報告』
数井みゆき編、誠信書房、2012 年

心理療法に関わる臨床心理学者らによる論集。「元受刑者の社会復帰支援におけるアタッチメントの病理と理解（工藤晋平）をはじめ、医療・福祉・教育・司法の現場において、アタッチメント（愛着）理論にもとづいて実践的な支援をおこなう方法について検討する。